

# 『和泉式部日記』は三条西家本だけでは読めない

——『和泉式部日記』三系統論再読・続稿——

森 田 兼 吉

平安時代・鎌倉時代の日記文学をとおして『和泉式部日記』ほど本文研究と注釈・作品研究が乖離している例はないのではないか。

『和泉式部日記』は普通三条西家本を底本としたテキストによつて読まれているが、例えば、それには次のような文がある。(三条西家本の引用は小林茂美氏解説の勉強社文庫の写真版により、句読点、濁点等を付し、また問題としたい箇所には適宜傍線を施した。墨付きの面から数えた丁数を示す)。

またの夜おはしましたりけるもこなたにはきかず。人ぐくかたぐくくにすむ所なりければ、そなたにきたりける人の車を、くるまつ、人のきたりにけるにこそ、とおほしめす。(一五オ)

この文では「くるまつ、人のきたりにけるにこそ」の部分に帥宮の心中思惟となるが、宮の心中思惟の中に「侍(り)」という丁寧語が出てくるのはおかしい。傍線部は、寛元本系統では(寛元本は吉田幸一氏『和泉式部全集 資料篇』所収の飛鳥井雅章筆本の写真版による。句読点等は三条西家本の場合と同じ)、

くるまのあるをみて、「ひとのきたりにけるにこそ、車は侍り」

と聞ゆれば、うし、かへりなむ、とておはしましぬ。人のいふことはまことにこそ、とおほすも、(一六ウ)

とあつて、「車は侍り」を含む文は、車を見た帥宮の従者が宮に言ったことばとなる。なお傍線を施した「うし」は、『和泉式部全集 本文篇』の「寛元本系統異」によれば、宝玲文庫旧蔵本は「よし」であり、黒川家旧本も現天理大学図書館蔵の本を突見すると「よし」であり、筑波大学蔵横山由清手沢本(扶桑拾葉集本)の前半には寛元本系統の木村正辞旧蔵本との異同が注されているが、「よし」の前後には細かく注記されているものの「よし」には何の注記もなく、おそらく木村本も「よし」だったのであろう。「うし」は飛鳥井雅章本の誤謬で、寛元本系統の原型は後掲の応永本系統と同様「よし」であつたと推定される。応永本系統でも(京都大学国語国文学資料叢書『応永本 和泉式部物語 京都大学蔵』による)、

車を御覧じて、「人の侍にこそ、くるまつ侍り」ときこゆれば、おほすも、(一六オ)

で、小異はあるものの寛元本に近い。寛元本か応永本のような形が

『和泉式部日記』は三条西家本だけでは読めない ——『和泉式部日記』三系統論再読・続稿——

原型で、三条西家本では二つの「にこそ」に移りして大量の文を脱落させたものであろう。

わたくしが『和泉式部日記』の三系統本の性格・系譜を論じ、三条西家本の単独異文は信じられないことを述べ、その例としてこの部分を指摘したのは昭和三六年のことであった（後掲論文）。この考えはわたくしの系統論と共にすぐ吉田幸一氏によって認められた（『和泉式部研究一』昭和三九 古典文庫。P.二七二）。かりに系統論から離れたとしても、三条西家本の本文の奇怪さはすぐに目につくはずのものであった。その後の本文研究では、伊藤博氏『和泉式部日記伝本の研究』（昭五六 桜楓社）は「三条西本の誤写箇所」の項で問題個所の直前の部分を挙げてここには触れておらず、他の部分で欠文を指摘している（P.二七六）だけで、どう考えておられるのかはよくわからないが、大橋清秀氏『和泉式部日記本文の研究』（平三 和泉書院）は森田の説を肯定され（P.四九一―二）、寛元本を底本とした小松登美氏『和泉式部日記全訳注 中』（講談社学術文庫 昭六〇）も森田説を示して三条西家本の脱文を認めておられる（P.三二）。にもかかわらず、三条西家本を底本とする諸注釈書では、いくつかの日記文学作品から抜粋した本も含めて、ここに触れているのは、新潮日本古典集成『和泉式部日記 和泉式部集』（昭五六 新潮社）の頭注で野村精一氏が「車侍り」について、この語法不審。宮の眩きか。応永本は「人の侍るにこそ車侍りと聞ゆれば、よし帰りなんとて……」これは侍者のことば」と書いておられる程度である。この注の後数行分は空白になっているから、せめて応永本を「人のいふはまことにこそ」まで引いていただきたかった

のだが、他の注釈類は全く他系統の本文には触れていない。応永本との対校を特色とする加納尾義衛氏の『対校 和泉式部日記新釈』（昭四八 白帝社）などせつかく応永本と対校していながら、この問題については語釈でも補説でも一言もないのである。『和泉式部日記』研究でも三条西家本を底本としたテキストによるだけで、他系統の本が参照されることはまずない。これは一例だが、このような注釈・研究の現状はどういうことであろうか。

## 二

わたくしは最近、『和泉式部日記』本文研究を研究的に展望し、問題点を述べたことがある。そこでは、一頃行われた系統論とそれに立脚した原型本（現存諸本から辿りうる共通祖本。作者の書いた原本とは区別する）再建への方法論が、それには限界があると見捨てられ、三系統のそれぞれの本の性格を明らかにしようという方向に移っていったこと、しかしその限界なるものは必ずしも示されてはいず、各系統本の性格の追求にも本文研究としての限界があり、再び最初の立脚点に立ち返る必要性を説いたのだが、本論はそれを承けてさらに論旨を徹底させることを目的とする。その論の過程で、本文研究と注釈・作品研究との乖離の理由の一面もわかってくるはずである。

寛元本系統の本がにわかにな注目を集めたのは、昭和二八年九月であった。川瀬一馬氏によつて『和泉式部日記』の作者を藤原俊成とする説<sup>2)</sup>が出され、学会にセンセーションを巻き起こしたが、その説の最大の論拠となつたのが黒川家旧蔵本で、同時に田中家旧蔵本も

紹介された。寛元四年の奥書を持つことから寛元本といわれるが、この系統の飛鳥井雅章筆本が間髪を入れず同年十一月から翌年の六月にかけて吉田幸一氏により「平安文学研究」誌上に翻刻され、この系統の本ひいては『和泉式部日記』諸本に対する関心は急速に高まっていったのであった。飛鳥井雅章筆本の翻刻が完結した二年後には早くも伊藤博氏による『和泉式部日記諸本の性格について』(国語 四の四)が発表されている。氏の論では三条西家本系統、寛元本系統、応永本系統、扶桑拾葉集(群書類従)本系統の四系統のうち、扶桑拾葉集(群書類従)本系統については、「応永本を基にして寛元本の要素をとり入れた混成本」とされたが、これは定説としてゆるぎのないものになっている。また、応永本系統は「寛元本系統に属しながら三条西家本の要素をとり入れた末流本」とされ、結局「三条西家本と寛元本とは別種の系統をなして対等の地位に立ち存在している」とされたのであった。扶桑拾葉集(群書類従)本系統は別にして他の三系統の関係を図示すればつぎのようになる。

寛元本系統

↓ 応永本系統

三条西家本

これは鈴木知太郎氏<sup>3)</sup>によって認められた。鈴木氏の四系統本の関係図はもっと複雑で合理的であるが、基本的には伊藤氏の結論によつてまとめられたものである。

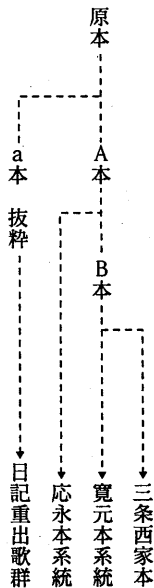
これに対してわたくしは「和泉式部日記三系統本の性格 序説」(國學院雜誌 昭三六・六)で伊藤氏に反論し、次のような結論を

出している。

1 現存の諸本はすべて式部が手習いのように書いたという文章中の和歌一首を誤つて地の文に紛れさせたある一本(原型本・A本)を共通祖本としている。

2 三条西家本と寛元本系統とは共通祖本(B本)を持つている。  
3 応永本系統はB本を経ない、三条西家本・寛元本とは対立する系統の本である。

この結論は吉田幸一氏『和泉式部日記研究』(昭三九 古典文庫)によつて承認されている。わたくしは後に『和泉式部正集』の日記重出歌を考察し、それをもこのとき作成した三系統本の関係図に組み入れて、次のように図示している。



これらのうち森田の説いたA本の存在は、伊藤氏も含めて本文研究の論すべてによつて認められている。したがつて現存諸本間の本文の異同はすべてA本以後に生じたものであり、草稿本とか浄書本とかいふ形で、作者の関与するものではまったくなかつた。物語であれば、ある時代にそのような形で享受された、ということ、本文の異なるいくつかの写本があつても、それぞれをそのまま尊重するという立場もありうるであろう。しかし、日記文学は特定の作

者の自己表白の文学であり、あくまでも作者の真実の声に迫る手立  
てが求められなければならない。ただし『和泉式部日記』の場合は  
原本と現存写本との間にA本という存在があり、それ以上に遡るこ  
はきわめてむずかしいが、A本は原本からそう離れたものではない  
らしいという推測はできる。

伊藤氏の三系統本の関係図とわたくしのそれとでは大きく異なっ  
ている。伊藤氏の論では応永本は寛元本系統と三条西家本との混成  
本であり、末流本であつて、『和泉式部日記』の本文の校訂にはま  
たく役に立たない本ということになる。そして伊藤氏の論でも、三  
条西家本も寛元本系統も遡ればA本に至るはずだが、三条西家本と  
寛元本とが本文を異にする場合、どちらがA本に近いかはわかりに  
くい。語法、その系統の性格の綿密な調査から迫っていくほかはな  
いだろうが、明確な語法の誤り(例えば三条西家本では下一段の「給  
ふ」の使用にごたつきが見られる。伝本致)を除いては、どちらと  
も取れる場合が多い。一方森田の関係図によれば、応永本はB本を  
経ていないから、三条西家本・寛元本の誤りを正す可能性を有する  
重要な伝本ということになる。また系統本間の相互干渉があまり多  
くないとすれば、一、二字程度の誤りやすい字形からの誤写は別と  
して関係のない二本がおなじような誤りを犯す可能性はほとんどな  
いであろうから、三条西家本と応永本系統とが一致して寛元本のみ  
が異なっていたり、寛元本系統と応永本系統とが一致して三条西家  
本のみが異なっていたりする場合、共通する二系統本の本文の方  
が正しい(原型に近い)ということがいえる。三条西家本・寛元本  
系統の単独異文は信頼できないということになる。それでは三条西

家本と寛元本系統とが一致し、応永本系統のみが異なっている場合  
はどうだろうか。三条西家本と寛元本系統の共通本文はB本の形を  
伝えている可能性が高いだろう。B本にも誤りは当然あるが、B本  
の方が転写を重ねてきた現存の応永本系統の諸本より信頼がおけそ  
うだから、三条西家本と寛元本の共通本文の方が正しい(原型に近  
い)。蓋然性が高いだろう。そこで、三系統本を対校して二系統の本  
文が一致した場合は、他の一系統の本文よりもその二系統の本文の  
方が大体において正しい(原型に近い)、ただし、応永本系統の単  
独異文についてはそれが正しい可能性もあり、慎重に扱わなければ  
ならない、というのがわたくしの考えであり、これも関係図と共に  
吉田氏前掲書によって承認していただいた。ただ、後で考えてみれ  
ば、応永本の単独異文の場合の処理の方法が非常に主観的にすぎた。  
三系統本を対校して、と簡単にいったが、現在その系統の本が一本  
しか知られていない三条西家本は別として、寛元本としては飛鳥井  
雅章筆本、宝玲文庫旧蔵本、黒川家旧蔵本、横山由清手沢本に校異と  
して四〇〇箇所ほど付されている木村正辞氏蔵本(実物は、田中家  
旧蔵本と共に所在不明)が知られ、応永本は写本が多い。これらを  
整理してその原型本を考えねばならない。応永本系統の諸本の関係  
についてはすでに論じたことがあり、共通祖本(応永本の原型本)<sup>5)</sup>  
復原の可能性についても示したことがあるが、近頃金井浩文氏に  
よつて応永本系統の本文整理の試みが成されている。このように応  
永本もその共通祖本に遡つて考えれば、B本よりもそれほど劣つて  
いる本かどうかは疑問になつてくる。また、次のような調査結果も  
ある。わたくしは『和泉式部正集』の日記重出歌の第二群・第三群

は『和泉式部日記』から和泉式部の歌だけをかなり杜撰なやり方でだが抜粋したものだと考えている。ただその抜粋の基となった本は、手習い文の歌を地の文に紛れさせてはいず、A本を経ていない本で、日記重出歌はA本以前の『日記』の姿をわずかにでもかいま見せてくれる可能性を持った貴重なものであった。日記重出歌群と三系統本の本文を（寛元本と応永本については祖本に復原した形で）比較したことがあるが、その結果A本と日記重出歌群の拠つたA本とはそれほど差がなさそうだということになる。そして日記重出歌群の本文と応永本の単独異文との関わりでは、

1条・寛の共通本文と一致するもの

一三

2条・寛の共通本文と相違し、応と一致するもの

六

のような結果が出ている。日記重出歌群を組み入れることによつて、1は三条西家本と寛元本系統の共通本文が応永本系統の単独異文より正しい可能性が強く、2では逆に応永本系統の単独異文の方が正文を伝えていることになる。約二対一で、少ないサンプルではあるが、応永本系統の単独異文のうち三分の一弱が正文を伝えている可能性があるとされており、『日記』全体に及ぼして考えれば、応永本系統の単独異文のうち三割程度はA本に近い本文を伝えている可能性があるとすることになる。むしろあくまでも蓋然性にとどまるが、いずれにしても、三条西家本と寛元本系統の単独異文は誤謬の可能性がきわめて高いのである。

このように伊藤氏の系統論と森田・吉田幸一氏の系統論とは大きな違いがあった。しかし、それではどちらに妥当性があるのか、それについての検討はかつて一度も成されたことはなく、諸系統本の性

格を究明する方向に本文研究は移っていったのである。

もつとも現在は伊藤氏は前掲のような関係図を考えてはおられない。森田のいうA本の存在を認められ、『伝本攷』ではご自分の系統論には触れず、森田の関係図とそれを承けた吉田氏の関係図とを掲げておられる。そして（右に引用させていた吉田幸一氏のお説が、和泉式部日記諸本研究の一つの到達点を示すものと考えてよからうか）とされながらも、もつとも、「共通祖本復原の可能性云々」という点についてはいろいろと問題があらう。「共通祖本復原の可能性がある」というのは、いわば楽観的な立場で、「可能性がない」というのは悲観的立場であるといつてよからうか。私の現在までの研究段階では、「可能性あり」とか「可能性なし」とかいうことに言及できないが（P一四）と述べておられるのは、森田や吉田氏の系統論が信じきれないないのであらう。森田・吉田氏系統論・系統本関係図が正しければ、三系統本間でそれぞれに異同がある場合はどうしようもないし、原型本以前にはなかなか遡りにくいのだが、たとい三条西家本以外は近世の写本であっても原型本再建の可能性はあまりにも明らかに覚えてくるはずなのである。この系統論が信じきれないからこそ、伊藤氏は語法の調査や伝本の性格研究に向かわれたのではないだらうか。

もつともと本文研究はむずかしい。自分で少しでも手を染めてみなければ何もいえないという面もあるのだが、本文研究のサイドに共通見解のないことが、よけいその成果を利用しにくくしているのではないだらうか。その意味でも森田・吉田氏の系統論と原型本再建の方法は十分に吟味・検討されなければならない。例えば、森田・



に式部の歌では、「きのふ山べを見たらましかば」とあり。見なかつたことへの未練、口惜しさは相変わらず強い。ところがそれに対する宮の歌は「そよやそよなどでやまべをみざりけんけさはくゆれどなにのかひなし」である。断られたことに残念だと思つるのは常の心持ちだろうが、断られて「悔ゆる」というのはかなりおかし。断られてこの歌が成り立つためには、

そうよ、そうよ、どうして（昨日）山べ（の紅葉）をみなかつたのでしうか。今朝になって貴方がどんなに後悔したつて、後の祭り、なにの効もありませんよ。

と和泉式部を責めるような口調で理解しなければなるまい。急に傍観者的になつて、思いやりのあるいつもの帥宮の態度とはどこか違うのである。それに、虚心によめば、「けさはくゆれど」はやはり宮自身の後悔と理解するのがまっとうであろう。そこで他の系統論の本を見ることになる。まず寛元本では、

「此ごろの山の紅葉いかにおかしからん。いざ、せ給へ、見に」とのたまへば、「いとよく侍なり」ときこえて、その日になりて、「けふはものいみとてとちこめられてあればなんいとくちおしう。これすごしてやかならず」とあるに、

(四二ウ四三オ)

「そのよ」以下は省略するが、このようになってゐる。同じ部分の応永本は、

「この此の山の紅葉いかにをかしからん。いざたまへ、みんなの給はすれば、「いとよく侍り」ときこえて、その日になりては、「けふは物忌にとちめられてあればなんいとくちをしう。」

これこれすぐしてはかならず」との給はせたるに、(四二オウ)とあり、小異はあるものの、これらの本では物忌だと断つたのは帥宮だったということになる。そしてこれにはもう一つの資料がある。『和泉式部正集』には、『和泉式部日記』から式部の歌だけを抜粋した前述の日記重出歌群の他に岩波文庫本の歌番号で二二一―五、二二七―二三二という日記重出歌がある。これは帥宮の歌をはつきり「帥の宮」「宮」として載せていること、一三三三に『和泉式部日記』には見えない帥宮への歌があることから第二群・第三群の重出歌とは無関係で、和泉式部の歌反故から出たものという点で研究者の見解は一致している。ということは、『日記』以前の、その素材の姿をうかがわせるもののだが、「もみぢば、」の歌はその二三二に次のような形で見える。

宮より、「紅葉見になむまかる」とのたまへりけれど、その日はとどまらせ給ひて、その夜、風のいたく吹きければ、つとめて聞ゆ

紅葉は夜はの時雨にあらじかし昨日山べを見たらましかばさすがに『和泉式部日記』とは表現がまったく違う。しかし、これでも紅葉見物を断つたのは帥宮と読めるのである。

それだとよくわかるのである。紅葉を見にと誘う男にも承諾する女にも、それはかなり強い決断のいることであつた。それだけに、宮の真意なり覚悟のほどなりを見てみたいという思いも和泉式部にはあつたはずである。それが当日になつてはぐらかされ、「くちをしう」思つたのも当然であつたらう。本当に物忌なのか、いざとなつたら体面(体裁)に宮は負けたのか。もしそうだとしたら、屋敷へ

おいでと誘つたあのときのことばもどこまで信じられるのか。そうした複雑な思いを想像しながら読んでいくと女についての『和泉式部日記』の表現はよく理解できるのである。それと、帥宮が断つたのであれば「けさはくゆれどなにのかひなし」という宮の歌も納得いくものになってくる。その歌を書いた手紙の端に、

あらじとは思ものからもみぢばのちりやのこれるいざ行てみんととりつくるうような歌を贈るの、女が

うつろはぬときはの山も紅葉せばいざかしゆきてとふとふもみ

とそつげなくあしらのもうなずけるのである。宮が断つたとする寛元本・応永本の方が系統論からいえば原型のはずで、作品の読みもそれを支持し、『和泉式部日記』の素材をもうかがわせる日記重出歌もそれを裏づけているのである。なおこまかな点を見ても、前掲の文の傍線部分はその系統本の独自異文だが、寛元本系統のそれ「いさ、せ給へ」(いさ給へ)「みに」(みん)が括弧内の三条西家本・応永本系統の共通本文より劣ることは確かだろう。それに比して応永本の独自異文はこの場合は即断しにくい。

似たケースの例をあげよう。『和泉式部日記』の最初の部分で帥宮は式部に「いかゞみ給ふ」といつて橘の花を贈り、式部の「かほるかによそふるよりは……」の歌に、宮は、

おなじ枝になきつ、おりしほと、ぎすこゑはかはらぬせものと  
しらすや

と返歌するのだが、傍線部の「ずや」は他系統本では「なん」となっている。そして式部の歌反故から出たと思われるこの第一群の日記

重出歌二二八でも「なむ」なのである。それが原型と見るべきであろう。「なん」の方がやわらかく押しつけがましくもなく、ここにふさわしい。

読んでいて違和感を覚えるといえは、帥宮に自邸に来ないかと誘われて、迷いつつ決断したもののお迷う女の心の動きを記した文章中の

……この宮づかへほいにもあらず、いはほのなかこそすま、  
ほしけれ、うきこともあらばいかせん、いと心ならぬさま  
にこそ思いはめ、猶かくてやすぎなまし、ちかくておやはらから  
らの御ありさまもみきこえ、又むかしのやうにもみゆる人のう  
へをもみさだめんと思ひたちにたれば…… (四一ウ四二オ)

という個所で、親や姉妹の次に子どもが出てくるのはわかる。しかし、ここでなぜ傍線部のような表現をするのだろうか。「昔の人の形見にも思われる子供」(新編日本古典文学全集)のように訳すのが無難だが、表現を尊重して直訳すれば「昔の人(橘道貞)そつくりに見える子ども」ということになるだろう。帥宮との愛の中でなぜ道貞を持つてきての表現をしなければならないのか。他系統では「ほだしのやうに見ゆるひと」(寛元本系統)か「ほだしのやうなる人」(応永本系統)のようになっている。後の方には異同もあるけれども、「むかし」は「ほだし」でなければならぬ。おそらく後の部分は応永本系統が正しく「ほだしのやうなる人」が原型で、「わたくしを現世につなぎとめる子ども」なのであろう。なお三条西家本のこの文の「ちかくて」も単独異文で寛元本系統(四六オ)・応永本系統(四五ウ)とも「ちかくてだに」である。この「だ



に」は重要な助詞で、出家はできないといつても、だからそのまま家において親姉妹や我が子の面倒が見られるわけではなく、帥宮邸に入ろうとするのである。こうした微妙な心情を伝える「だに」が無関係な複数の本に後でつくはずはない。「ちかくてだに」が系統論の示す通り原型なのである。そしてそこまで読み込まなければ作者の心情に肉薄することはできない。なお「みきこえ」も三条西家本の単独異文で寛元本系統・応永本系統共「みきこえん」（字形は京大本）である。どちらであるかは語法その他からは判断できないところだが、理論通り「みきこえん」を採っても問題はない。系統論が確認できれば、こうした箇所判断も容易なのである。

最後の贈答歌、

いかにおぼさるゝにかあらん、心ほそきことゝもをの給はせて  
「猶よのなかにありはつまじきにや」とあれば、

くれ竹の世、のふるごとおもほゆるむかしがたりはわれの  
みやせん

ときこえたれば、

くれ竹のうきふししげき世中にあらじとぞおもふしげし  
かりも (五〇ウ五一オ)

最初の和泉式部の歌の第五句は寛元本とは一致しているが、応永本系統ではこの歌は、

呉竹のよ、のふるごとおもほえん昔がたりは君のみぞせん

(五六オ)

となっている。第三句の異同はこの段階では何ともいいがたいが、第五句は「君のみぞせん」と三条西家本・寛元本とはまったく正反

対になっているのが注目される。「猶よのなかにありはつまじきにや」という宮の心細い思いを三条西家本等では肯定し、「それではわたくし一人が生き永らえ、……二人の恋の昔語りはわたくしだけがするのでしょうか」と和泉式部が沈み込んで歌うこともありえないことではない。そして事實はたしかにその通りになったのだが、応永本系統のように、「いいえいいえ宮様は長生きなさつて、……二人の恋の昔語りはきつとあなた様だけが（こそが）なさいましょう」と慰め歌う方がはるかに自然だし、そういわれたからこそ、「あらじとぞおもふしげばかりも」という「猶よのなかにありはつまじきにや」という前のことはよりもっと強い表現の歌が重ねて詠まれているのではなからうか。『和泉式部日記』から抜粋したと見られる日記重出群の第二群を見ると、この歌は四三〇として、

なほ世にもありはつまじきことのたまはずれば

呉竹のよの古言おもほゆる昔語りはきみのみぞせん

とあった。『和泉式部日記』の場合、わたくしのような立場に立つて三条西家本などのような形を応永本のような形に変えるような書写者もあるいはいるかもしれない。しかし『正集』のような形では意図的な改変は生じにくく、日記重出歌群をも入れた系統論の立場からいえば、応永本系統と日記重出群とが一致する「君のみぞせん」が原型、というより原本の形だったと見てよいだろう。この部分には『和泉式部日記』成立の事情を示唆するものとしてこれまでに何度も論及したことがあるので参照していただければ幸いである。また、三条西家本で、和泉式部の歌の前にある「とあれば」も独自異文。他系統本のように「とのたまはせられたれば」に改めても問題はない。

帥宮が恋心を明かした二首目の歌、

うちいでゝもありにしものの中／＼にくるしきまでもなげくけ

ふかな

に答えた、

けふのまの心にかへておもひやれながめつゝのみすぐす心を

(三才)

この末句は他系統本のように「すぐす月日を」でなければならぬなど、例はいくらもあげられるが、きりがない。伊藤博氏の『和泉式部日記伝本攷』では二系統本を対校して本文を吟味しておられるところが多いが、そこを三系統の本にして読んでみると、わたくしの本文論からの結論と一致するところが多い。

その『伝本攷』の中に「返らせ給」と「おはします」という項がある(P二七五―八)。

「あすはものいみといひつれば、なからむもあやしと思てな  
ん」とてかへらせたまへば

こゝろみに雨もふらなんやどすぎてそら行月のかけやとま  
ると

人のいふほどよりもうめきてあはれにおほさる。「あがきみや」  
としてしほのぼらせ給ていでさせ給とて、

あぢきなく雲井の月にさそはれてかけこそいづれこゝろや  
はやく

とて返らせ給ぬるのち、

(一九才ウ)

の文で傍線部は寛元本(一八才)が「おはしぬる」応永本は「おは  
しましぬる」と両者は類似したものになっている。伊藤氏は作品中

の諸系統本の用例を精査されて、宮が女の家から自邸に帰る場合「お  
はします」を使用したのは三例(三条西家本は一例)で、「かへら  
せたまふ」が六例、一方、宮が女の家を訪問する場合は「おはしま  
す(おはす)」が使用され、三条西家本・応永本に二七例、寛元本  
に二六例あるという。そこで伊藤氏は、

……和泉式部日記における「おはします」の使用例からみるな  
ら、三条西本の「返らせ給」のほうが普通の述べ方ということ  
にならうか。応永本が「おはします」を使用したその意図はさ  
だかでないが、前の「かへらせ給へば」との重複を避けたので  
あろうか。あるいは応永本の「おはします」のほうが先であつ  
て、それをあとから三条西本が前文と合わせて「返らせ給」と  
改めたのであろうか。(P二七八)

と述べておられる。ただ伊藤氏が指摘しておられるように、女の家  
からの宮の帰郷を三系統本揃って「おはします」で表現している例  
が一つある。

れいよりもうかびたることゝもをの給はせて、あけぬればおは  
しましぬ。(四八ウ)

これは三条西家本の本文だが「おはします」の部分ほどの系統の  
本も一致している。そうである以上、前の例の場合わたくしの方法  
論では「おはしましぬる」か「おはしぬる」(両系統本の信頼度か  
ら考えて多分前者)が原型ということになるがそれで問題はないこ  
とになる。

三条西家本の単独異文が信頼できないといったが、ただ一つ問題  
になるのは、

「……これもてまいりて、いかゞみ給、とてたてまつらせよ」とのたまはせつる」とてたちばなの花をとりいでたれば

(二一才)

の傍線部分が他系統本にはないことである。すなわち、寛元本では、「……これもてまいりて、いかゞみ給ふ、とてたてまつらせよ」とて、たちばなをとりいでたれば、

(二一才)

とあり、応永本では、

「……これまいらせよ。いかゞ見給ふ」とて、橘の花をとりいでたれば、

(二一才)

であり、どちらも「このたまはせつる」という小舎人童の説明がないために、帥宮のことばと小舎人童のことばとが同時に終わることになってしまふ。かつて応永本と同形の群書類従本のこの個所に疑問を持ち、いくつかの改訂案を示された五十嵐力氏が雑誌「文学」に『異本和泉式部日記』として紹介・翻刻された三条西家本に接して感激し、「さすが愚按よりは自然で勝つてゐる。要するに、流布の諸本は「と」から「と」に飛び移つて、大切な中間の「このたまはせつる」を書き落したのであつた」といわれたのを思い出す。たしかに三条西家本の方がわかりやすい。しかし、わたくしの系統論の場合、無関係な二本がまったく同じ誤りをおかすだるうか。後の例だが『讀岐典侍日記』に、

「三位の御もとより『さきさき』の御心地のをりも、御かたはらに常にさぶらう人の見まゐらするがよきに、よく見まゐらせよ。をりあしき心地を病みて参らぬが、わびしきなり」と申せど、えぞ続けやらぬ。

(新編日本古典文学全集P三九八)

のような例もある。この場合は「えぞ続けやらぬ」ためであつたのかもしれないが、この時代の散文は今日のように理路整然と書かれているとは限らなかつた。寛元本による小松登美氏の『和泉式部日記』上「全訳注」の校異の項には「とて」について「三条西本」この上に「このたまはせつる」があり、意味はその方が通るが、この時代の、前後関係から意味がわかれば、言葉を途中で言いさすやう方の例と見てこのままにした」とある。原型が完全であるともかぎらないし、もともと走り書きの得意な和泉式部でもあつた。「このたまはせつる」のない方が原型であつたと見てよいのではないか。もう一つ疑問なのは、

こゝろみに雨もふらなんやどすぎてそら行月のかげやとまると

人のいふほどよりもうめきてあはれにおほさる。

の「う」が応永本系統と一致し、寛元本系統には「こ」とあることである。ここは「こめきて」の方が「うめきて」よりふさわしいのだが、寛元本系統のみが正文を伝えているのは不思議である。ただ、ここは一字の異同で、「う」と「こ」は誤りやすい字形を有してゐる。原型は「このきて」であつたのに、三条西家本と応永本が誤写を犯したと見てもよいのではないか。

三条西家本はたしかに最も古い写本で三条西実隆(一四五五—一五三七)の筆と伝えられる。しかし、『和泉式部日記』の一伝本にすぎない。寛元本系統の寛元四年(一一四六)の奥書は信じがたい(森田『和泉式部日記論攷』が、応永本も応永二年(一一四一)享録二年(一一五九)の奥書を持つ本があり、その共通祖本は三条

西家本より遡るかもしれない。そして中世・近世に流布していたのは応永本であった。おそらく三条西家本はある家に秘蔵されていたのであろう、流布の跡が少ない。そのため損傷は少なく、合理化や添削意識もあって一応は読みやすいのだが、誤文も多い。注釈にあたっては重要な異文は注すべきだし、論じる際も他系統の本を参照しなければならぬ。

- 注1 『和泉式部日記』三系統論再説 國學院大學院友学術振興会編『新国学の諸相』所載 おうふう 近刊。
- 2 和泉式部日記は藤原俊成の作 青山学院女子短期大学紀要一 昭二八・九
- 3 『和泉式部日記』昭三一(解説・校異篇を昭三三に付載)武蔵野書院
- 4 和泉式部正集の日記重出歌本文考―日記原本再建の資料として―國學院雜誌 昭四一・四 『和泉式部日記論攷』第一章の二。
- 6 和泉式部日記応永本系統本本文整理の試み 上下 大学院研究年報〈中央大学〉一九・二〇 平二・三 三・三。中 中央大学国文 三三三 平成二・三
- 7 注4に同じ。
- 8 和泉式部日記の本文意義趣味考『大日本古典の偉容』昭一七 道統社 所収。後『昭和完訳和泉式部日記』昭二一 白鳳出版社 でも説かれる。